



下

町の太陽、みたいな建築家である。建築の世界には「自作建築」「ローコスト建築」という確固たるジャンルがあり(商業主義の権化みたいなこの国では当然ながら「超」異端であるが、海野さんはその分野の第一人者である。現代の日本では、建築は文化になっていない。住宅はチラシを見て「買っ」ものであり、少し余裕のある人は展示場のデコレーションケーキみたいなモデルハウスを見学して住宅メーカーに頼む。寿司屋のカウンターに座って「にぎりの竹」しか注文しない客みたいなものだ。

海野さんは、まったく違う。こういう風潮にたいして「ウソくさいな。本物じゃないな」と精いっぱい抵抗している。よくしたもので、世の中にはこんな建築家に共鳴して、住宅の設計を依頼してくる人もいるのだ。生涯で一番高価な買い物を買わせるのだから、建築家と施主(依頼主のこと)はここでは「同志」の関係になる。

海野さんがユニークなのは「設計」だけでなく「工事」も自分でやってしまうことだ。なぜかと聞くと「子供のころから工作が好きでしようがなかったから」と、今でも子供みたくい顔で答える。実はこれがローコストにつながる。「パブル崩壊後、内外価格差の例に住宅価格が取り上げられる。日本の住宅メーカーの粗利は五割くらいある。これもウソくさいのだが、設計料はサービスマス、などと言う。住宅価格の全体を一〇とすると、メーカーの場合は材料を含めた工事費が五、利益等が五になる。私は、設計料が一、利益が二、工事費が七でやっている。工事の質が同じなら(同じではないが)二割安く済み、価格が同じなら二割(ほんとうはもっと)工事の質がいい」と言う。

江東区扇橋という典型的な下町に、三年ほど前にだいたい完成した事務所のある建物を見せてもらった。間口一間半、奥行き一〇間のウナギの寝床みたくいな敷地に建つ四階建て。デザインなどに

頓着しないその他大勢の建築物の群れの中に立つ異彩。ローコストの手法として骨組みの鉄骨工事、水回り工事以外は、屋根も壁も天井も床もキッチンも家具も、ほとんどが手作りであるという。材料もベラベラの化粧合板などの類は使わない。納得の作りだ。今、夢を二つ持っている。一つは、まだ手掛けたことのない幼稚園が保育園をやること。もう一つは、阪神大震災の被災地に安くて丈夫な家を作ること。海野さんは、自作可能なコンクリート建築の工法を完成した。費用は四分の一くらいで済む。建てたい人がいれば、私がノウハウを出す。腕力のあるボランティアも集まってほしい」と呼びかけていくつもりだ。

「東京の江東、荒川、墨田、足立区などでは、一〇坪前後の極小敷地の家に数百万人が住んでいる。彼らは住宅・建材メーカー、公庫にも相手にされないような弱者。そういう人の家造りに燃える海野さんの、なんとしても実現させたい夢である。」

(今井 伸)

海野健三

下町で活躍する手作り建築家・

1949年、東京都足立区に生まれる。74年、東京理科大学卒業。建築事務所、建設会社勤務などを経て、80年、「海建築家工房」を設立して自立。85年、自邸をセルフビルドで建設、以後、設計から工事まで行うユニークな方法で住宅を手掛ける。この間、「花火を見る家」が87年度「住宅建築賞」優秀賞を獲得したのをはじめ、かなりの頻度で各種の賞を受賞している。

photo▶内林 克行
(江東区扇橋の自作事務所の4階で)